

多々良比賣花搗三斗料鹽三升

右漬春菜料

〔新撰字鏡〕草辛所中反、長也、衆也、姓也、

〔傍廂後篇〕たゞらめ

源氏末摘花卷に、たゞらめの花のごとかいねりこのむ云々、此たゞらめは、かいねりとひとしく赤き故に、姫君の鼻の赤きにたとへたるよしは聞えながら、いかなる花とも思ひ得ず、古人の注釋もなし、新撰字鏡に、辛ラマとあるのみにて、何の花といふ事しれがたし、もしは辛荑ならんか、格物論に、辛荑一名候桃とあり、時珍云、紫苞紅焰作蓮及蘭花香、和漢三才圖會に、曰、辛夷とあり、新撰字鏡には、字書に目なれぬめづらしき字あり、

〔比古婆衣〕たゞらめの花

多々良女いかなるものなるにかと、こゝろにかゝりつるに、此比源順朝臣歌集の古本の寫をみるに、此は富士谷成章が、歌仙歌田の條里の形に、歌四十五首を廻らしよむべく、書と、のへられつる中の歌に、をりくくにほふたたべのうめなればをしめどかひな花のにほひやとみえたり、但し單行の此集の一本には、いはゆる四十五首をなべての歌と一列に書り、其は群書類從に收めたるに、たゞらべをたしへと書るは、疊字をわらく書たるか、又は彫工の失にてもあるべし、さる誤このほかに、今考ふるに、このたゞらめは、たゞらめの急りたるにて、紅も多く見えたり、又三句うめなれや、梅のことなるべし、註そは内膳式にみえたる多々良比賣も同物にて、漬年料雜菜の條、漬春菜料の中に、多々良比賣花搗三斗料鹽と載られたるこれなるべし、さてその多々良比賣花とあるは、紅梅の花にて、搗とはそを搗とりて、鹽漬にして奉る料なるべし、註今の俗に梅花の苔を鹽漬にして、食の酢酒の肴などにすることあり、馥氣ありてめでたきものなり、しかるに其を漬て後、尋常の花の白きはや、黄ばみゆくを、紅梅はほころばむとせる苔のほどは、殊に